

「お金の上手な管理法」
学校教育を通じた金銭教育を考える

大矢 透 （高水高等学校附属中学校 1 年）

はじめに

「お金」というものを考えてみた時、今まで「お金」について深く考えたことがないのに気付いた。また、学校でも「お金」そのものについて教えられたことはないことにも気付いた。社会科で経済のしくみや流れについては学習するが、自分が実際に使っているお金と結びつけたことはない。そこで、学校を通して「お金」を考えることができるのかについて、考えてみることにした。

学校におけるお金の教育

1. 生活科（小学校）での体験 1

ぼくが、学校でお金の使い方を学んだただ一つの記憶は、生活科の体験学習で、児童一人一人が切符を買って、隣の市まで社会見学に行ったことだった。小学校二年生の時のことだ。自分でお金を払うという経験がなかった子がたくさんいて、びっくりしたのを今も覚えている。ただ、この時も、切符の買い方のことばかり教えられて、「お金」そのものの意味、「お金は切符を買う手段」ということは、教えられなかった。

2. 生活科での体験学習 2

生活科では、児童が考えた祭りをしたり、お店屋さんごっこをする時間があった。もちろん、本物のお金は使わず、学校で作ったおもちゃのお金を使うので、リアル感はなかった。この学習の延長として、バザーの時、子ども達にも、店を出させようとか、店の手伝いをさせようという案が、何度か出たそうだが、実現したことはない。どうも、お店屋さんごっこならいいけど、本物のお金を子どものうちから扱わせたくないという、大人たちの意思がそこにあるような気がした。

3. 算数（数学）の計算

現在5年生のぼくの弟は、低学年の時計算が得意ではなかった。仲の良い近所の子も同様で、二人は、宿題の計算ドリルをする時、いつも答えを写していた。ある日、一行ずらして答えを写したのを見つけ、ぼくは、二人に「計算がきちんとできないと、大きくなって困るぞ」と言った。そしたら、二人は、「だいじょうぶ。私ら、計算は苦手だけど、お金の計算は得意だから。円がついたら、絶対間違えんもんね。」と、すずしい顔で答えた。その時、「お金」というものの本質は分からなくても、人間には、生まれた時から「お金は計算するもの」という本能を持っているのだと思った。

実際、この二人は5年生になって、鶴亀算や植木算は間違っても、商売がからむ、「定価の何割で仕入れて、何割のもうけを考えて売値をつけた」という問題は間違わないことを考えると、人間の本能「お金の計算」ということを上手に教育に生かすべきである。最近、大学生の数学力の低下が騒がれているが安易にカードでお金を借りた時、その利息がどのくらいになるのか計算できないのではないだろうか。買い物、借金など計算は生活と切り離すことができないのだから、もっと数学教育を考えなければならないだろう。（本能をうまく引き出せるように。）

4. 国語とお金 その1

お金にまつわる言葉やことわざを習うことがある。例えば「金は天下のまわりもの」や「金の切れ目が、縁の切れ目」など。

一応、その言葉がどういう内容のことを言っているのかは習う。今までの記憶では、どうも金の力とか、それに対する人間の弱さというものの言葉が多かったようだ。ただ残念なのは、表向きの意味だけしか知らないということである。もう一步ふみこんで、そこにどんな哲学が存在するのかまで話し合えれば良いのだが、国語の中では無理なのだろうか。

5. 国語とお金 その2

文学作品の中で、お金について考えさせられるものがいくつかある。ぼくの心に一番残っているのは、「クリスマスキャロル」と「賢者のおくり物」の二冊である。

「クリスマスキャロル」の主人公スクルージは、とにかくけちで、お金を節約する一方、他人には、高い利息をつけてお金を貸しているという、お金に関していやな面を2つそなえている人間である。しかし、そのために、人間としての喜びの感情を失っているのである。最後には、よう精が出てきてスクルージに人間としての喜びをとりもどさせるが果たして、この物語は、何を主題としていたのかと考えることがある。

「賢者のおくり物」では、お金のない貧しい夫婦が、お互いのプレゼントを買うために、自分の大切な物を売ってお金を作る場面がある。労働によってお金を得られない時は、大切な物を売ってお金に替えるという手段を学ぶことができるが、教育の中では、相手のことを考えることのすばらしさをまず考えさせるのである。もちろん道徳教育も必要であるが、一歩進んでお金について考えるという問いかけはできないものだろうか。

ぼくの読書歴にはない本であるが、高一の兄に聞いたところによると、古典文学や外国文学にも、お金について考えることができる本があるそうだ。シェイクスピアの「ベニスの商人」やモリエールの「守銭奴」、「日本永代蔵」「世間胸算用」等々。

現在、子どもの読書量が減ったことが問題になっている。むやみに読書をと言うのでなく、目的を持った読書もたまには必要であろう。文学を味わいながら、お金の学習もできるなんて一石二鳥だと思うのだが。

6. 社会—経済のしくみと流れに加えて

社会では、簡単ではあるが、経済のしくみというものを学ぶ。しかし教科書の内容を覚えるだけで、実際に、自分のさいふの中に入っているお金と結びつけるところまでにはいかないし、今の社会経済は、資本主義によるものだというところまでは詳しく学ばない。ましてや、資本主義が生みだした経済の矛盾などは、自分で本を読んで学ぶしかない。ITの発達で、ほしい資料は手に入りやすくなった。しかし独学ではなく、他の人の意見も聞きたいし、大人の生の声も聞きたい。

自分の持つお金のことまで考えられる時、初めて、社会経済の学習が終わるのではないだろうか。

7. 総合学習として

新しく、総合学習なるものが始まった。小学校では、ボランティア、環境問題、IT、英会話などを総合学習の課題としてきている。生きる力をつけるというのが目的らしいが、本当に生きていくうえで、お金のことを考えないのでよいのだろうか。いじめによって、何百万円もお金をとられ、自殺した子どもの例もある。お金とはどういうものか、お金を手に入れるにはどうするべきか、手にしてはいけないお金もある、など子どものうちに、きちんと教育されていなかった結果のようで残念である。

生きる力をつけることが目的なら、ぜひ総合的な金銭教育を考えてほしいものだ。

8. その他の教科として

1～6以外には、家庭科がお金に関係があるだろう。調理実習や生活設計で、お金の計画をたてることがある。しかし、机上の学習で終わってしまっている。例えば、調理実習で購入計画を立てたら、実際に自分たちで購入してみれば、お金を使うことと身近になるし、よりよい反省もできるのではないだろうか。

まとめ

今まで、「お金」というものについて考えたこともなく、学ぶこともなかったのは残念である。しかし、よく考えてみると、学校現場には、「お金」について学ぶ入口がたくさんあるのだ。しっかりした金銭知識や感覚があれば、世の中を騒がすさぎ事件やいじめによるかつあげなど防ぐことができるのではなかろうか。

これからは、学校という教育現場でのしっかりした金銭教育を考えなければ、お金を上手に管理できない人がますます増えていくだろう。